



◆お品書き◆
 【その言】CODEレター VOL.24
 【その式】プロジェクトニュース
 【その参】国際機関訪問ツアーちらし

以上

「スリランカのまなざし」 ～スマトラ沖訪問報告～

野崎 隆一

(CODE理事/まちづくり協議会事務局長)

7月5日から15日までスマトラ沖復興支援の為、理事の野崎隆一と事務局の飯塚明子さんをスリランカに派遣しました。

7月5日に出発して7月9日に帰国。スリランカにいたのは、6～8日の正味3日間という、慌ただしい訪問でした。現地入りは、4回目という飯塚明子さんに同行するので、気持ちの負担の少ない訪問になりました。出発前のやりとりはありましたが、とにかく現地を見て、被災地の人々に会って、情報交換をして、すべてはそれからという姿勢で、臨むことにしました。

■幼稚園プロジェクト

被災地に100箇所幼稚園を建設するプロジェクトを推進しているティラカシリさんの案内でゴールの近くの仙台コープが支援して作られた幼稚園を訪問しました。子供達やお母さん達が花を持って出迎えてくれました。よく見ると出発前に送られてきた図面はこのものだったのです。しかし、図面から想像していたものと現実との違いは、圧倒的でした。入り口にドアはないし、窓にサッシも無い。その中で、15人くらいの子供達が、可愛らしい制服に身をつつんで座っている。窓からは、迎えにきたお母さん達が見つめている。私は、一瞬理解できたように思いました。大切なのは、建物の品質レベルではない。こうした器があること、子供達に希望を寄せる多くの人々の存在こそを大切にしなければならない。建築家としての専門性はあまり役に立ちませんでした。訪問した幼稚園の様子



訪問した幼稚園の様子

■漁業協同組合プロジェクト

津波で被害を受け廃校となった小学校の教室で50人近く

の漁民の人たちと会いました。舟を失って漁ができなくなった人たちが舟を共同管理して助け合おうというプロジェクトです。舟だけでなく漁具も必要だ、集魚灯は手入れが大事だから個人の所有が良い、漁獲の配分ルールを決めよう、次々意見がでて地区の若いリーダーのナナルジャヤンタさんがまとめていました。終わりに近づいて、あいさつを求められたので「スリランカの歴史の中で、このような助け合いのシステムがあったのではないのでしょうか。それを見つけて現代的に復活させると考えた方が、みんなに理解されやすいし、外国のまねをするのではないこと、誇りをもってやれるのではないのでしょうか」といったことを発言しました。そうすると即座に反応があり、仏教の教えで相互扶助の考えがある。その教えにしたがって行われていたシステムが協同組合の考えに近いと口々に発言する人が現れたり、テグスを持ち出してスリランカの伝統的漁法を説明してくれる人が現れたりしました。神戸でも感じたのですが、復興という大きな課題を乗り越えるためには、地域のアイデンティティや誇りのようなものの持続が大切だと強く認識しました。緊急対応よりその後の暮らし復興を支援するCODEとしては、カネやモノを送り込むだけでは無く、いろんな気づきを通してアイデンティティや誇りを持続させることの大切さを感じました。

■スリランカのまなざし

今回の訪問中、最も強く感じたのは、出会った人々の真摯で無垢なまなざしです。スリランカの人々は、色が黒いこともあるのかもしれませんが、とても目がきれいです。どこへ行っても釘付けにするまなざしに囲まれました。心の底から真摯に発言せざるを得なくなるようなまなざしです。このようなまなざしに囲まれた3日間は、何か新たな力を与えてくれたような気がします。

「ボランティアって何しとん？」

石川 理彩

こういう質問は、よくある。私の場合は、CODEという組織のお手伝い。だた誰かの役にたてたらなあという思いから参加している。

今回は、発送作業について紹介する。CODEでは毎月一回活動レポートや会員の方へのお知らせを発信している。広報誌をたたみ、封筒に入れる。あとは、封をして送るだけ。これを毎月いろんな職業の方が有志でやっている。初めて参加する人がほとんど。初対面でもすぐになじめること、意見交換などができるところがボランティアの魅力。

このように、ボランティアは気持ちと行動。24時間のうち、自分の数時間が誰かの喜びの声に変わる。誰でもできること。どんどん自分を求めてくれる人に、手をさしのべてほしい。全ては自分のため。

事務局よりお知らせ

毎月ボランティアの日は5人～10人の方々によって、発送作業やセミナー企画会議などが行われています。事務局スタッフの海外での活動についてのここだけの話やボランティアさんの情報交換などいろいろな話をしながら行われています。ぜひご参加ください。

CODE古本市オープン。

CODE事務局エントランスに古本市がオープンしました。新古書に的を絞り、昔懐かし難しい本から、意外な掘り出し物まで、多種多様。現在のところ約200冊。

最近、CODE事務局に会議に来られたお客様には、掘り出し物があったりとなかなかの好評で、少しずつですが売れるようになりました。値段は全巻均一100円です。

これらの本はすべて、神戸学生・青年センターさんにご寄付を頂いたものです。売上は海外の災害支援を支える資金として使用されます。お近くにこられた際は、ぜひお立ち寄りください。意外な一冊に出会えるかも！

6, 7月の活動記録 6/1～7/30

- 6/3～15 イソ南東部バム地震支援調査 (斉藤)
- 6/7 国連地域開発センター研修受け入れ (村井・飯塚)
- 6/10 災害ボランティア世界会議反省会 (黒田理事)
- 6/16 CODEボランティアの日 (飯塚・斉藤)
- 6/17 CODE6月度理事会
- 6/18 桃山学院高等学校講演 (斉藤)
- 6/19～7/1 JICAリソカ緊急開発調査ミッション参加 (飯塚)
- 6/21 ボランティア・プラザ 新助成金説明会参加 (斉藤)
- 6/29 堺女性センター講演会 (村井)
- 岸和田小さな友の会「アガソ・リソカ報告」(村井)
- 7/4 朝来市立生野中学校講演会 (斉藤)

- 7/5～7/15 ストウ沖地震津波支援調査 (野崎理事・飯塚)
- 7/6 龍谷大学「国際NGO論」講義 (斉藤)
- 7/9 立命館大学ボランティアフェスタ講演 (斉藤)

広がるアフガンぶどうオーナーの輪

アフガニスタン訪問を終え、その報告と今年も引き続き支援のお願いを前号でさせていただきました。多くの方々より引き続きご支援のお振り込みと、また新聞にもとりあげて頂いたためか新しいオーナーさんが多く加わって頂けることとなりました。本当にありがとうございます。これまで頂いた支援者の方々のお声はたくさんあるのですが、その一部をご紹介しますと思います。

-このぶどうオーナー会員証がかわいいので、この会員証を友人の結婚祝いにあげようと思い申し込みさせていただきました。-先日主人が亡くなりました。このぶどう畑が再生されることをとても楽しみにしていました。これからは主人の思いを引き継いで代わりにアフガニスタンのぶどうを支援していきたいと思います。

-私は体が不自由で、あまり外に出ることはありません。でもこのアフガニスタンの通信を読むたびに、アフガニスタンの風を感じられるようで、とても楽しみにしています。応援しています。

このぶどうプロジェクトは多くの皆様、一人ひとりがアフガニスタンのぶどう畑再生を夢みて支えられていると感じさせられます。

スタッフ一同いつも胸に止め、現地へ伝えていきたいと思えます。今後ともご支援・ご協力を宜しくお願い致します。

ありがとうございます 5/21～7/20

会員・寄付者ご芳名 (以下順不同・敬称略)

◆一般寄付

個人：榊原殷子、松島恭子、小林郁雄、中村大蔵、三田村 雅 (以上兵庫県)、古本扶美子、金子久子 (大阪府)、成毛典子、室崎益輝、三島宣彦、大倉記代 (東京都)、鵜飼愛子 (静岡県)

団体：ぼのぼの (兵庫県)、たき出し実行委員会 (大阪府)

◆会員

正会員 個人：村上忠孝、鵜飼 卓 (兵庫県)

賛助会員 個人：塚本謙三、下村誠治、福井敬朗、榊原殷子、祇園明敏、岩国正次、上田耕蔵、植田博士、小林まゆみ、酒井富美子、宇都幸子、木田拓雄、小林郁雄、山田一成 (以上兵庫県)、七里紘子、稲葉真澄、村上スミ子、菊地 健 (大阪府)、上川 正、田中美恵子 (岡山県)、古市智子 (京都府)、鵜飼愛子 (静岡県)、大西和枝、吉澤近江・秀男、加納敏一 (滋賀県)、杉山百合子 (神奈川県)、羽山聡美、阪田朋子、三島宣彦 (東京都)、酒巻佐代子 (鳥取県)

団体：新宗連 青年会近畿連盟 (大阪府)

※CODEはメールリングリストを通じて情報の発信も行っています。参加ご希望の方は事務局までメールにてご連絡ください。



プロジェクトニュース イラン版

CODE海外災害援助市民センター

〒 652-0801 神戸市兵庫区中道通 2-1-10

Tel: 078-578-7744 Fax: 078-574-0702

e-mail: info@code-jp.org

URL: http://www.code-jp.org/

■イラン南東部バム地震救援プロジェクト（2003年12月26日～）

6月3日～15日、第7次イラン南東部バム地震救援プロジェクトのためイラン・バムへ訪問してきました。以下現地での活動を報告致します。

<音楽教師養成トレーニング/「しあわせ運べるように」交流>

CODEは音楽教師養成トレーニングを半年以上前から実施しています。総勢20名程いるのですが、現在はお正月休みの後ということや、センターが新しい場所に移ったこともあり、参加者はまばらでした。しかし、今集中的に教えている2人の先生は、既に幼稚園で実習に入っています。そして、その実習授業をサイドが見に行き、指導が行われています。トレーニングの様子は順調に進んでいると感じました。

以前より行っている神戸の小学校、明親小学校との日本語版「しあわせ運べるように」とバム版「しあわせ運べるように」の交流ですが、今回は明親小学校の音楽会DVDを持参しました。その様子を見せると、トレーニングを受けている先生は「音楽会はとてもいいわ。私たちもあんなことができるといいんだけど。KOBEの様子はなんとなく状況は違うけれど、バム地震が起こったすぐ後のことを思い出したわ。持ってきてくれてありがとう」と感想を言われました。しかし、私のほうこそ音楽のなかった幼稚園に音楽を広めようがんばっている先生たちを見て、希望を感じ感謝をしたい思いでした。

また子どもたちは真剣な眼差しで映像を見ていました。バムの応援歌として当時の明親小6年生たちによって作られた「輝くあなたを」では、歌詞の中の「バム」という言葉が聞こえたようで、少し照れたような笑顔になりました。その後「しあわせ運べるように」の10年間を特集したニュースを見せると、神戸の地震の映像では顔をしかめ、新潟の大雪の映像には目をまるくしていました。そして自分たちの映像が写ったときには、また照れながらうれしそうに笑っていました。最後に感想を聞くと、一人の子どもは「地球から地震がなくなればいいのに」と言い、そしてもう一人は「新潟の人たちの雪での生活はバムより大変だろうね。」と言いました。

<音楽教室の日>

イランの小学校は夏休みに入ったので、音楽教室も朝と夕方に分けられて行われるようになりました。午後からは他の幼稚園の生徒たちが初めて音楽を習いにやってきました。彼らは小さなベルを見るのも、叩くのも初めて。これから何が始まるのかドキドキしながら、うれしそうに座っています。サイドはベルのバチの持ち方から教え、ゆっくりと音を出します。「ドードー」とサイドが言いながら、ドを叩く。続いて子どもが「ドードー」と元気に声に出す。まるでどこかの英会話CMのように「え～っと」と言えば、「え～っと」と繰り返す勢い。じっと見ていると様々な子どもがいるのがわかります。勘がよくサイドが出す音になんとかついていく子、口は元気でもベルは全くはずれたところを打っている子。じっと座ったままサイドを見つめている子など。しかし、夕方の別のクラスからは見事に成長した音楽教室の子どもたちの様子を見ることができました。リコーダーなど全く吹けなかった子どもたちが素晴らしい演奏を聴かせてくれました。またその曲はサイドが作曲をした「カラフルデイズ」。感動で涙！ 今日初めて楽器に触れた子どもたちの成長が楽しみになりました。



始めて音楽教室に来た子ども



素晴らしい上達ぶりの生徒たち。

<センターの今後の運営について>

今後の AHKK の将来計画について話し合いをもちました。センターが新しい場所に移り、持続的なセンター運営のためにどうするかを話し合うことが、今回私が訪れた一つの目的でした。事前にバタニさんと話し合った計画を元に各教室の先生たちの意見を聞くことにしました。この先生たちが今後 AHKK のバム支部の運営に大きく関わってくるので、先生たちの意見は重要です。私たちの案としては、将来的には女性委員会、若者・子ども委員会等（児童労働の問題を将来的には含める）と各委員会に分け、そこから代表者を出して全体委員会を作り、すべての企画・運営を行うというもの。ポイントは、現在無料で行われている音楽クラスや再開される体育教室などの生徒たちから少しでも登録料を支払ってもらおうということ。それを各委員会が管理をし、必要な物資の購入や、将来、恒常的センターの建設費用にしようという計画です。それによって常に外からの支援を必要とするのではなく、少しでも自分たちで運営していける体制を作りたいと考えています。

先生たちは、最初は委員会がどういった役割をするのか、よくわからない様子でしたが、説明をすると皆、賛成してくれました。AHKK で働くバム出身の先生、アレズは「バムの子どもたちはあまりにも無料ですべてのものが与えられることに慣れすぎたわ。でも将来的なことを考えるとそういった登録料を取り、自分たちで運営していけるようにするべきだと思う」と言いました。しかし、この登録料を絶対的なものにするかは意見が分かれました。しかし、最終的には絶対に支払わなければ教室には入れないので、ある程度家庭に金銭的余裕がある子どもたちだけのクラスになってしまので、あくまでもボランティアな気持ちとして集めるようにしようということになりました。

先生たちにとって、体育館やコネックスがすべて使用可能な状態になるまでは、イメージがつかみにくいですが、自分たちのセンターは自分たちで運営するようになることという目標は確認ができたので、少し期待がもてる展開になりました。

これまでの斉藤のバム活動報告と斉藤バム日記の詳細は CODE ホームページをご覧ください。



現在のチャイルドケアセンター

<斉藤バム日記>

ある金曜日、お友達のテーリー夫妻とピクニックへ行くことになりました。

10年後どんなバムを夢見ますかと聞いてみた。奥さんは「今より少しだけよくなっていればそれでいいわ」と言われ、旦那さんは、「自分には関係ないな」と言われました。いつもいろいろなイランの歴史や植物について教えてくださる優しい方がなぜと思いました。

しかし、彼の顔には、地震で若くしてなくした娘と息子なしの将来を夢見ても仕方がないと書かれている気がしました。なぜ助けられなかったのか、もし彼らが生きていればと思わない日はないのでしょう。

まだまだ復興の道のりは遠いことを思い知らされました。

■募金について

募金にご協力して頂ける方は、下記の郵便振替口座にて通信欄に「イラン地震支援」「アフガニスタン支援」とそれぞれ明記してください。なお募金全体の15%を事務局運営・管理費に充当させていただきます。

口座番号:00930-0-330579

加入者名: CODE

CODEの活動は、様々な方のご支援に支えられて行われています。すべての皆様にご報告を直接させて頂きたいのですが、物理的にも財政的にも制限があり、ホームページやメーリングリストなどを通して広くご報告させていただいております。ご理解のほどよろしくお願い致します。

当センターのホームページ <<http://www.code-jp.org>> にも同様のものをアップしております。

(以上編集:事務局)



プロジェクトニュース

スリランカ版

CODE海外災害援助市民センター

〒 652-0801 神戸市兵庫区中道通 2-1-10

Tel: 078-578-7744 Fax: 078-574-0702

e-mail: info@code-jp.org

URL: http://www.code-jp.org/

スマトラ沖地震津波復興支援プロジェクト (2004年12月26日～)

CODE はスリランカで現場のニーズと CODE の経験を活用し、3つの支援①防災教育 ②建設支援 ③漁業支援に取り組んでいます。7月5日から14日までの第5次派遣の内容を含めて、これまでの活動を以下に報告します。



<防災教育>

CODE の防災教育プロジェクトは日本で津波防災教育として知られている紙芝居や絵本等を使って、スリランカの被災した子ども達と一緒に津波の教訓や命の大切さを学ぶことが目的です。また次世代を継承する子ども達が、防災教育を通して「命の尊さ」を大人たちに伝えることにより、安心で安全な地域づくりの主役になる期待もあります。

6月22日にカルムナイ YMCA で被災した子ども達による防災教育プログラムが実施されました(写真参照)。そのプログラムの内容をここで報告します。

まず、カルムナイ YMCA のボランティアスタッフ3人が「なまず大明神」の読み聞かせをしました。すべてタミル語だったので、「なまずだいみょうじん」という言葉だけ理解できます。劇の合間に2、3度笑い声が聞こえました。



次は、「稲むらの火」。ナレーター少女1人と被災した少年5人が演じました。テーブルを丘に見たててその上に主人公の五兵衛さんらしき少年がいます。その下で農民を演じる少年たちが稲を刈っている様子(写真参照)。日本の昔話ですが、スリランカの少年も稲の刈る手つきはとても慣れていて、うまく演じています。子どもたちは真剣にじっと聞き入っている様子で、後で聞くと稲穂に火を付けて農民に津波を知らせた、五兵衛さんの気転に感心したと言っていました。



最後に、子どもたちが自分たちで作った脚本をもとに劇を演じました。これがとても好評で、劇の間子どもたちはずっと笑い続けていました。演じている子どもたちもとても演技がうまく、堂々と演技をしていたように思いました。タミル語で分からなかったもので、どのような内容だったか後で聞いてみました。津波が来て住民の人が逃げようとする、自分の持ち物を気にしたりさまざまな理由を付けて、頑固で逃げようとしないうる人がいます。(その頑固な人を演じた少年がおもしろかったようです。)他の住民は彼に逃げるようにながすが、彼は一向に言うことを聞きません。結局彼が津波にのまれて命を落としてしまいます。最後は悲しい結末ですが、津波が来たらとにかく逃げるといふ考えに反抗した人が亡くなるという教訓を示しています。後で子どもたちと話をしてみると、とても面白くて勉強になったと言っていました。



このプログラムを通してはっきり分かったことは、3つ目の子どもたちが劇の脚本から演技まで主体的に関わったプログラムのほうが、子どもたちの顔がいきいきしていたこと。そして、それを見ている子どもたちも心から楽しんでいる様子だったこと。もちろん、日本の物語からも学ぶことはたくさんあり、実際に子どもたちも感心していましたが、大切なことは日本の物語をただ紹介することではなく、その日本の物語をどのように自分たちの生活や災害の備えとして考えることができるかであると実感しました。そしてどのように自分たちの言葉で表現して、家族の人やコミュニティの人に伝えていくことができるかが大切です。劇の練習期間は3日間だけでしたが、それまでに1ヶ月半程 YMCA ボランティアが子どもたちと絵を描いたり、遊んだり、提供された日本の津波の話をお聞かせたりしました。プログラムは45分くらいでしたが、それまで子どもたちが日本の津波の話をおとして、脚本を考えたり、劇の練習をしたりする過程がとても大切なことで、今後他の地域でも広めていけたらと思います。

<幼稚園再建支援>

幼稚園建設を選んだ理由は、津波で多くの幼稚園が破壊されてしまったうえ、主要な援助機関は、主に公立の小中学校の建設を支援し、90%が私立であるスリランカの幼稚園には、支援が行き届かないからです。幼稚園を再建するにあたって、7月7日に神戸の建築、まちづくりの専門家であり、CODEの理事でもある野崎氏が現地に行き、現地の専門家と設計図面について協議をしました。



野崎氏は、柱だけでなくブロック積の壁にも鉄筋を入れてコンクリートを流すとともに、柱頭を鉄筋コンクリートでつなぐと建物強度が上がるとの意見を出した一方、予算面（補強に多くの予算が必要）から考えると、むしろ海岸から離れて、津波被害の心配のない立地を選ぶ方が合理的であると述べました。そこで、必ずしも災害に強い幼稚園を作るよりも、予算面と幼稚園の立地（海岸から離れていて、津波の被害の心配が少ないこと）を考慮し、被災した子どもたちが安心して遊べる場所を早く作ることが今必要とされていると思われる、そのようにプロジェクトを進めていきたいと思っています。



現地の関係者と協議する野崎氏

また、日本でも大問題になっているアスベストが一般的にスリランカでも安価な屋根材として使われています。しかし、CODEが支援する幼稚園では、アスベストの代わりに、クレイタイル（かわらのようなもの）を使用する予定です。

CODEは東部のアカライパットゥと北部のジャフナに幼稚園を建設することに決まりました。アカライパットゥは、津波でもっとも被害が大きかった東部のアンパラ県にあります。現在は20人から30人の子ども達が仮設住宅の幼稚園に通っているという状態です。ここでは、教会が提供してくれた土地に幼稚園を建てる予定です。ジャフナでは、Arali Southという村で幼稚園を再建する予定です。ここは、紛争と津波の二重の被害を受けた地域です。幼稚園は津波で流されてしまったので、子ども達は新しい幼稚園ができるのを待っているという状態です。

<漁業支援>

12月26日に発生した津波で、大きな被害を被った漁師達が1日でも早く仕事を再開することは、被災地の復興における最優先課題の1つです。もともと漁業労働者は社会的に虐げられている人々が多く、津波後その状況はますます悪化しました。そのような状態を受けて、CODEはUFFCと連携して被災地域で漁業協同組合を設立することになりました。国際NGOの中には、船や網を漁師に無償で配布しているところもありますが、CODEは協同組合の形式を取り入れ、あくまで被災者のエンパワ

ーメントを高めようとするのが目的です。無償で船や網を提供することの弊害は、そのプロセスに被災者の意思や主体性が入らないことにあると考えています。

支援地域は、サムドラガマとクダワラという名前の漁村に決まりました。サムドラガマ漁村はスリランカ東部海岸のトリンコマリ地区に位置し、400所帯が住んでいます。津波で全ての家屋が全壊し、約75人が亡くなりました。住民は家族や家、漁業の道具を全て失いました。生き残った住民の中にはトラウマの症状がある人もいます。クダワラ漁村はスリランカ南部海岸のハンバントタ地区に位置し、1,200所帯（約8000人）が住んでいます。津波で450所帯が全壊し、200人が亡くなりました。ほとんどの住民がボートや漁業道具を失うと同時に仕事も失いました。



被災したクダワラ漁村

7月8日、飯塚と野崎氏がスリランカ南部海岸の、クダワラという漁村（マータラから東海岸へ30分程）の漁業組合の人と話をしました。村民のほとんどが漁業従事者であること、海岸から100mに設けられたバッファゾーンによりコミュニティが危機に瀕していること、津波で多くの漁民が船を失い暮らしの復興が見えないこと等の説明を受けました。漁業組合のリーダーのジャヤンタさんはこの地域で貧しく（大型船ではなく）小規模漁業に携わる労働者を組織して、漁業組合を設立しました。

まず組合員約50人と話をしてニーズを聞いた後で、その代表者ら6人と具体的に話し合いました。漁業組合員によると、彼らのような小規模漁業労働者にはこれまで支援がまわらなかったと言います。政府の支援は漁獲量を増やすために大型船や中型船の支援に偏りがちであるそうです。国際NGO等の支援は一般的に多くの漁師に小型のボートを提供するが、ただ提供するだけなので、住民は次に網や釣り針等が提供されるのを待っているという状態です。



ジャヤンタさんが設立した漁業組合には150人の組合員がいます。この中でボートを共有しながら（ボートはCODEが支援し、協同組合の持ち物になる）、売り上げの3分の1を協同組合に、3分の2を漁師に配分する予定です。さらにボートには限られた数の漁師しか乗らないので、その他の組合員は毎月小さい額のお金を協同組合に寄付します。そして、協同組合はそのお金を集めて、組合員と話し合いながら貯まったお金をどのように使うか決めていきます。具体的に提案された使い道は、新たなボートを買う、コミュニティの図書館のために英語の辞書を購入する、釣用のランプや漁具を組合員にマイクロクレジットの手法で提供する等です。協同組合にはルールを設け、経験のあるジャヤンタさんが組合員を組織し、組合員の意見をくみ取りながら協議し決定したことを委員会に提案します。委員会は代表、副代表、書記、ジャヤンタさんから成り、ルールに沿って物事を決定します。



漁業組合員とその家族

協同組合についてこちらが説明しようと思っただけでしたが、協同組合という概念はこのコミュニティに深く根付いているものだったので。組合員によると、協同組合の考えは仏教（スリランカの6割以上が仏教徒）の考えと深く結びついていて、コミュニティの人々は昔から少しずつお金を出し合いながらお寺を守ってきたそうです。お寺はそのコミュニティの人々の共有する財産なので、住民が少しずつお金を出しながら、お寺を守っていくという考え方は、協同組合の運営方法と似ていると組合員は言います。



意見を述べる組合員

野崎氏はコミュニティづくりで大切なのは、発明（新しい方法の押しつけ）ではなく発見（気づき）

であると言います。何か新しい方法を作り出したり、外部の人が新しいものを持って来るのではなく（もちろん情報や事例を提供することは大切）、その地域の文化や歴史に根付いた方法があることを認識し、その方法を住民が自ら発見し、誇りをもって行動できるようにサポートすることが大切です。外部から入ってきた支援者ができることには限界があります。漁業組合の方と会って、漁業組合の設立やおおまかなルールが決定しましたが、これは本当にスタートでこれからは何回も何回も協議したり、調整したりしながら組合員自身が協同組合を運営していくこととなります。彼ら自身による復興の過程をこれからも見守っていく予定です。

■募金について

募金にご協力して頂ける方は、下記の郵便振替口座にて通信欄に「スマトラ沖地震津波」とそれぞれ明記してください。なお募金全体の15%を事務局運営・管理費に充当させていただきます。

口座番号:00930-0-330579

加入者名: C O D E

CODEの活動は、様々な方のご支援に支えられて行われています。すべての皆様にご報告を直接させて頂きたいのですが、物理的にも財政的にも制限があり、ホームページやメーリングリストなどを通して広くご報告させていただいております。ご理解のほどよろしくお願い致します。

当センターのホームページ <<http://www.code-jp.org>> にも同様のものをアップしております。

(以上編集：事務局)